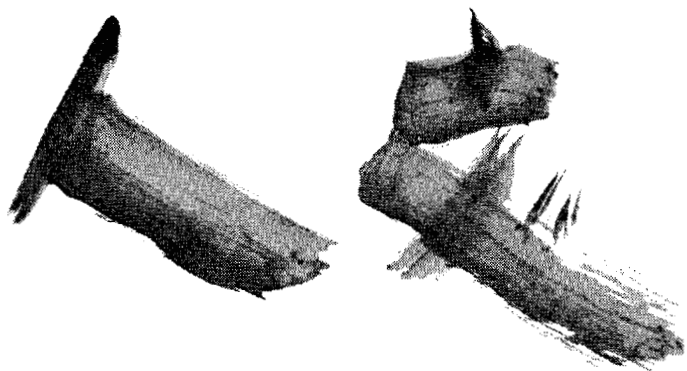




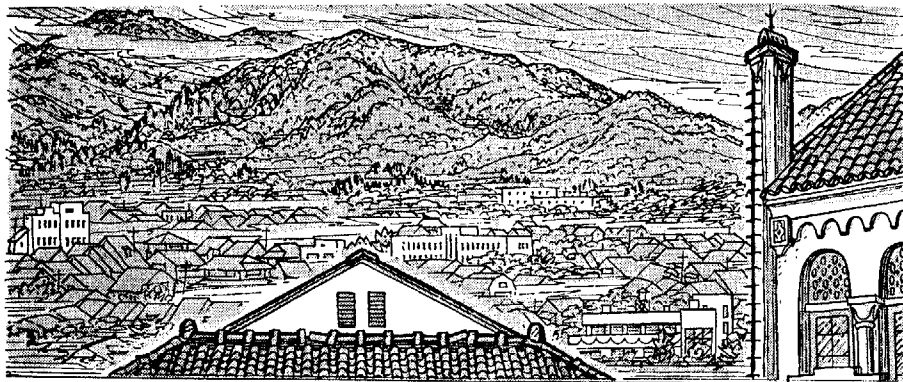
第三二號



1986

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



人 文 第三二号

1984年12月—1985年11月

も く じ

随 想	2
駢 鳴	柳 田 聖 山
旅の糧	フランソワーズ・サバン
Physiologia Subiunctiva	富 永 茂 樹
講 演	10
夏期講座	10
会沢安『新論』と国体思想(鈴木)／三月事件と十月事件(古屋)／商市街の蕭紅(村田)／『史記』と秦始皇陵兵馬俑(曾布川)／プリーストのカイエを読む(天野)／古代シニエールの土地制度(前川)	10
開所記念講演	17
夢野久作『瓶詰の地獄』のウソ(尾崎)／お雇い鉱山技師エラスマス・H・M・ガワの生涯と係累(山本)／初期中世の普遍論争(岩熊)	17
退官記念講演	20
技術史談義	吉 田 光 邦
共同研究の話題	26
文人趣味をめぐって	田 中 淡
啓蒙期政治思想と空間の適正規模	樋 口 謹 一
一九世紀の文明史的研究	横 山 俊 夫
旅	32
殷墟への旅、殷墟からの旅	小 南 一郎
イスタンブール再訪	前 川 和 也
中国旅行の醍醐味	曾 布 川 寛
書いたもの一覽	36
おくりもの(22)・人のうごき(22)・外国人客員教官・招へい外国人学者・外国人研究員・外国人共同研究員(23)・東洋学文献センター講習会(25)・講演会(25)・お客さま(29)	36

駢

鳴

柳田聖山

定年退職の年に、所長の特命を蒙り、随想のネタにも、当分は事欠かぬ。京都大学の觀光名所よろしく、中国關係の賓客は、好んで分館においでる。所長とは、ホストとみつけて、海外の学者には、殊に礼を尽している。

東洋学文献センター主任、尾崎雄二郎博士の案内で、重文級の書庫をみせるのだ。ωとπの床が、どうしてガラス張りなのか、蔵書数約五十万冊が、經史子集の順に列んでいて、すべてが一目で見透せる仕掛けと解く。応接室で茶礼、芳名簿に署名を求めて、ゆっくりと墨をするうちに、三〇分たつ勘定だ。話題は、尾崎博士の古代韻と、所長の禅仏教。順不同に話すうちに、さらに三〇分がたつ。

それではとあいさつのあと、さりげなく切りだす、用意の質問が一つある。

おくにのロバは、何と鳴きますか。

ヒーホーと、欧米の学者は二つ返事だが、中国の賓客は、質問の意味を解しかねてか、しばらくは無言である。唐代の禅の本の、日本語訳をつくるのに、それが需要である、ここ数年、おくにの先生に問いつづけていると、事を分けて話すと、いよいよもって答えがない。た



だいちど、威勢よく答えた人があったが、あとでみると、あれはロバではなくて、ラバでしたという。中国のロバは、結局は鳴かぬと知る。国語通信はナンバー60、尾崎博士の連載漢字の世界に、駙鳴のこと——柳田聖山師に——が出るのは、昨年十二月のことだ。許慎の説文解字にも、司馬遷の史記にも、駙鳴の記事はあるが、音声は記録されていないという。あとに引く世説の場合も、同じである。

先年、NHKの国際放送で、禅と日本文化のことを話したとき、海外のスタッフが教えてくれた結論と、ほぼ同じである。聖書以来、駙鳴はあるが、ヒーホーはない。法宝義林のデュルト博士も、欧米訳ならヒーホーでよいが、といわれる。

元来、中国の古典は、動物の鳴声の記録に乏しい。世説新語の傷逝篇は、駙鳴を好んだ王仲宣が死んで、弔客が次々に駙鳴をなしたとし、朱子語録は宋学の祖張載が、駙鳴に生々の気を観じたとするが、当の音声を伝えない。共に、欠典というべきか。

竜吟、虎嘯、獅子吼、狐鳴、犬吠のほか、鼠は何と泣くのか。わが五十万冊のうちに、音声の記録を欠くとせば、お隣りの東南アジア研究センター、歴史民俗博物館、アジア・アフリカ言語文化研究センターの、研究成果に待つほかはない。

所長職で果てたら、遺言にするつもりだった、駙鳴の研究を、今はどうやら自分でやるほかないようだ。老耄の薄倖である。



旅の糧

フランソワーズ・サバン

私が初めて新幹線に乗ったのは、シベリヤ横断鉄道で一週間をすごして間もなくのことであった。シベリヤ鉄道では、次第に変化して行く時差に従って食堂の営業時間が変わり、それにお腹のすき具合を合わせなければならなかった。新幹線に乗ってすぐ気づいたことは、時間に合わせて空腹を満たすことのみを気を配る世界から、空腹を覚える暇もなく食欲が刺激されつづける世界に飛込んで来たということであった。新幹線に乗っている三時間の間に、私の目の前をシベリヤ鉄道の一週間を凌ぐ量の食物が通って行ったのだから。しかも、まだその時には食堂車のあることも、各駅には沢山の食物が取り揃えられていることも知らないでいた。

フランスで汽車に乗った日本人の旅行者は、日本に比べてみてそのサービスの悪さに驚くに違いない。例えば、乗車前に買えるものといったら、古いサンドイッチや、いつ作られたともしれない年代物のビスケット、あるいは正価の三倍もする生ぬるくなった飲物などであり、それすら必ずしも手に入るとは限らない。そして、これらの買物ができなかった場合、車中ずっ



と空腹を我慢するか、食堂車があれば、そこに行くかしなければならなくなる。おまけに長距離列車でさえ、いつも食堂車がついているとは限らないのだ。

実際、フランス人が世界にいくらかなりとも自負している分野——食べる技術——でのこの怠慢には驚かされる。しかし、フランスの駅や汽車が乗客に食事をさせるよう整えられていないのは、組織的なサービスへの実際の需要がないからだと言われている。事実、一般に旅行者は弁当を用意して、駅で売っている高価で、不味い(ということを通じて)食物のお世話にならぬ様にしている。ちなみに、弁当として一般的なのはパンにハム、ごくたまにチーズを挿んだカスクロット(casse-croûte、フランスパンで作ったサンドイッチ)である。

私の考えでは、この怠慢にはもう一つ理由がある。それは、大多数のフランス人は、元来、必要に迫られた時を除いて汽車の中で食事をとることを好まない、ということである。客室という限られた空間の中で食べるという生理的行爲を、他人に目撃されることを嫌うのである。つまり、「パンをちぎる」(casser la croûte)、即ちサンドイッチを食べるというのは、時間と必要に迫られて空腹を満たす為であって、食事の楽しみなど入り込む余地がないのだ。けだし、「軽い食事をする」ことは飢えと動物的な属性を露呈する行為なのである。しかも、サンドイッチの食べ方にきまりなどなく、ごく普通に手で「気どらず」につ



まむのであるが、この手で直接つまむという食べ方自体が、どのような食物を食べようと、正規の食事ではないしである。フランスの食事（朝食は除く。それは食事とは見做されていない）は、空間的・時間的に拘束する秩序に嵌込まれていて、オードブルからデザートまでの（その間にたっぷり温かい主菜に時間を割く）不可逆的な進行が想定されている。その為、調理・給仕・飲食の洗練された組織化が必要とされている。特に飲食には特別の場が要求される。経済的なステータスに応じ食堂か台所がこの機能を果している。残りの空間はそれ以外の活動に当てられていて、飲食とその他の行為が同じ場所で行なわれないよう配慮されているのである。従って、経済的事情から空間を混同することは余り良いこととは見做されていない。このように見れば、列車内の客室は明確に定義されていない場であるものの、食堂よりサロンに近い性質を帯びているといえる。このようなことすら知らず、乗り合わせた乗客のすぐ目の前で公然と食事をするとは、所謂礼儀作法を欠く行為であり、結局、空間を混同して使用しており、自らの動物性を露呈してしまうことになる。つまり、美食の喜びのうち、手っとり早い表面的な側面しか知らない田舎者の如く振舞うことなのである。従って、何故、列車内では稀にしか食事をせず——それもカスクルトの場合が殆んどである——その食事の中身も創意に欠けているかが理解されよう。とにかく、サンドイッチは取扱



い易く、最も手軽な食品ではあるが、反面、この機能的な食物は料理としていたし価値も与えられず殆んど無視され、創意・工夫をかきたてるといふことにはならない。

また、たとえ今日、表面のカリカリした正統派カスクルットを好む人達がいるとしても、このようなカスクルットに出会うことは殆んどない。第二次大戦以降、肉料理と比較してのパンの価値が下落し、パンの味が悪くなったからである。幾軒かの著名なパン屋が、所謂「昔風の」パン造りを推め、この傾向を逆転すべく数年来努めて来た。現在、フランスのTGVで売られているのはこれらの店のパンで作ったサンドイッチである。この新しいサンドイッチとマクドナルドの「ビッグ・マック」の双方を食べて育つ我々の子供達は、いつの日か、乗り合わせた他の乗客達と一緒に、平気でパンをかじるようになるのだろうか。

(帰国寸前のサバン先生、制限枚数日本語文一〇〇〇字というのがフランス語文のどれだけの量か測りかね、訳文が結局四頁にわたったが、器に合わせて料理を加減する吝嗇は避け、出されたものを全て賞味してもらうことにした。本文は仏語原稿を山森良枝が訳し、天野史郎が校訂したものである。)



physiologia subiunctiva

富 永 茂 樹

別に名譽を汚すことにもなるまいと思うので実名を記すけれども、サバン先生は極度の飛行機嫌いである。彼女は《飛行機を憎んでいる》(御主人の表現)。ぼくの友人にも、ドイツへ行きたいのだが、飛行機がこわくて、数年以上もためらっているひとがいる。今度在研でもあたれば、やっぱりシベリヤ鉄道と船にでもするのだろうか。

そういうひとたちが聞くと氣持わるくなるだろうから(とくにサバンさんとの場合、あとにつづくにちがいない複雑な議論を支えるだけの言語能力もないし)、ふつうは告白するのを控えているが、実は、ぼく飛行機大好きなのです。それも、ただ空を飛ぶだけではなくて、ときおりエア・ポケットに入るとき、あるいは着陸に備えて次第に高度を下げるときに、一瞬経験する失落感が好きなのです。實際あの感覚はたまらない。たしかに不快ではあるけれども、しかしそのなかにどこかわずかながら、自分と世界とが消えてゆくような快感が残っている。

自動車を運転するひとにならわかってもらえるだろうか。たとえば観月橋など比較的長い橋の上で停車している横を大きなトラックが通ると、自動車ごとふわふわ揺れることがある。それから、めったにな



いが(？)、宿酔の朝のむかむかした気分(もっともこれは予期しない原因によるものではないので、経験としては低次元に属する)。また、カイヨワの《眩暈》の遊びも多分に似かよった要素で成立しているはずである。

どの場合にも、大仰に言えば、整序されているはずの日常世界にひびが入り、そこから混沌とした何ものかが見えてくる、しかも世界の不確かさが、意味や象徴のレヴェルではなしに生理的なところで出現する、そんな経験である。サルトル風の実存的な体験。フロイトの言う、抑圧されたものを喚起する《不気味なもの》。構造主義がお好みならば、《分節化》する以前の両義的な世界。あるいはパシュールの……。理論づけはどんなふうにもできるけれども、これ以上はやめておこう。

確固とした存在を叙述するのが直説法であるとすれば、それに反して接続法ばかりでもって話しているような、ふわふわとした、頼りのない、ひとによっては気持わるく耐えがたい、しかし別の者にとつては限りなく魅力的な経験——これこそが、サバン先生には申しわけないけれども、また誰から何と(たとえばマゾヒストと)呼ばれようと、空港でチェック・インするときから心をわくわくさせずにはおかない、秘かな生理的愉しみなのである。



講演



夏期講座（昭和六十年度） 六〇年八月一—三日

△原典を読む▽

於本館会議室

会沢安『新論』と国体思想

鈴木 木 祥 二

「尊王攘夷運動の指導理論」「明治新政府の国家主義政策の源流」の位置を占めると『新論』は一般的には評価される。さらに、「国体」は万世一系の天皇が国家統治権を保持しつづける国家体制だと理解されている。そうした評価を否定するわけではないが、『新論』の国体論には、「勇」や「和柔」という言葉で表現される理想社会の実現という内容も含まれているように思う。そこには東アジア世界の危機のなかで、その文

明の復興をめざすという強い意志が反映されているのではないだろうか。

『新論』は「民命」・「民心」に関する政治学であるというのが、私の出発点である。そこに展開される政治・経済・軍事などの改革案や国体・祭祀などはいずれも「民心」論の上に構想される。たしかに、近世の儒学者達は民本思想をくりかえし論じた。しかし、それらはもっぱら年貢徴収の安定した確保のため語られる場合が多かった。『新論』のいう民本思想は一八世紀後半以降の社会状況を前提に、年貢納入の機械・人形としての民ではなく、「心」をもった民を眼前にしている。人民が「利」（『経済的利益』）と「鬼」（『信仰』）にからめとられつつあり、「民心」が流動化している事態こそが、『新論』の著者達の危機意識の核心であった。この「民心」を治めること、その方法論が語られなければならない。諸改革の提起、すなわち「制度」の問題とは政令刑禁・典礼教化Ⅱ「制度」を通して「民心」をありうべき方向に秩序づけることである。その「制度」の確立のために古代の中国・日本の諸制度が援用されてくるのである。こうした「民心」の統治という考えは、明治啓蒙思想が「人事繁多……心の働も亦繁多」である状態を「文明」だと論じた立場の対極にあるといえるだろう。

「民心」を課題とする『新論』は同時に、武士の心や行動様式をも問題とする。『新論』が展開する「天下」についての議論は、先例旧格を破り、制度をつくりだし、それを運用する賢才＝英雄の出現を待望する。頼山陽は封建制は勢であると述べた。『新論』は何物もあらがいがたい時の勢を制する英雄をもとめる。そこにみられる熱情こそ『新論』が広く読まれる理由の一つであった。

三月事件と十月事件

——予審調書を読む——

古屋 哲 夫

この二つの事件はいずれも、一九三一年におけるクーデター未遂事件であり、政治の潮流を満州侵略の方向に大きく転換させる役割りを果たしたものとみられている。しかし事件は秘密のうちに処理されたため、今もって十分には明らかになっていない。そこで今日は翌三二年に続発した血盟団事件、五・一五事件関係者の未公刊の調書を参考としながら、この両事件を考えてみようというわけである。

問題は第一には、すでに一九一九年から北一輝によ

って唱えられていたクーデターが、何故この時点で最初に具体化されたのかということであり、第二には、当初は政界にも殆んど知られなかった三月事件が、どのようなルートで政治構造に衝撃をあたえ、次の十月事件を生み出すことになるのかという問題である。

まず基礎的な条件として、戦前のもっとも政党内閣らしい政党内閣とみられた浜口内閣が、前年秋、三〇年十一月に浜口首相が右翼テロで重傷を負うと、与党内対立を媒介として、たちまち弱体化してしまったという点をあげなくてはならない。つまり三〇年秋から三一年春にかけては、テロ効果が継続し滲透したとみることができる。そしてこの過程で、軍部・右翼勢力の連絡・結合関係が一挙に拡大したものとみられるのであり、例えば井上日召が血盟団事件、五・一五事件にいたる人的結合をつくり出し、関東軍と右翼勢力の連絡が密になったのも、この時期のことであった。

しかしここで重要なのは、クーデター計画は、こうした右翼勢力の拡大そのもののなかからではなく、軍中央部が乗り出すことによってしか生れえなかったという点であろう。具体的には、さきにみた内閣の弱体化に加えて、浜口首相の出席問題、幣原首相代理の失言問題などで議会が極度の混乱に陥ったとき、宇垣陸相が政権奪取の意欲を示し、それをきっかけとして、

陸軍中央の一部と大川周明一派との間でクーデター計画がつくられることになる。従ってそれは、登場の過程を逆にたどって、宇垣の意態が減退するという形で消滅することにもなるのであった。言いかえれば、三月事件は、クーデター計画としてはさしたる内容を持つものではなかった。

それ故、三月事件の意義は、この貧弱な内容によるクーデターの提起にあり、計画の貧弱さの故に、既成政党など他の政治勢力に気づかれることなく、陸軍中央部にクーデターの意思のあることを、関東軍と青年将校という二つの方向に伝達し、非合法的実力行使にのり出すきっかけを与えた点にみなくてはなるまい。それ以後は、関東軍の「謀略による満州侵略」の構想が国内での再度のクーデター計画に支えられながら、隠密の間に政治の中枢に押しあげられてくるのであり、この情勢を把握しえなかった他の政治勢力は、何の準備もなしに、柳条湖事件と十月事件の衝撃によって、一挙に後退を余儀なくされることになるのであった。

商市街の蕭紅

村 田 裕 子

東北作家蕭紅を現代中国文学史において位置づけると、「傍流の作家」ということになる。彼女は魯迅や茅盾、郭沫若のように文壇における主導的役割を果したわけでもなく、三十二年の生涯に残した作品も少ない。しかし、彼女のつくりあげた個性的な世界は、とかく政治思想に偏重しがちな現代中国文学において異彩をはなっている。

蕭紅は一九一一年、黒龍江省呼蘭県に生まれ、四二年、香港で死んだ。短い生涯のうち、二度ハルピンですごした。女学校時代と一九三三年―三四年。後者は夫となった作家蕭軍との出会いの時であり、また執筆を初めた時でもあった。彼女はのち上海で中央文壇にみとめられるが、生活は幸福ではなかった。彼女はハルピンの貧しくも希望にみちた日々をいとおしみ、『商市街』としてまとめ、三六年出版した。

『商市街』は四一篇の短文で構成されている。病みあがりの吟という女性、すなわち蕭紅が語り手となり、恋人郎華（蕭軍）との生活の断片を描いている。彼ら及び彼らの友人たちは、無名で非力な若者たちである。彼らは貧しさや餓えに苦しみ、矛盾し、口論し、許しあってはまた争う。しかし、あいかわらず何ものかになるうという野心だけは消えることがない。蕭紅は彼らを三〇年代ハルピン・商市街の風景のなかに封じこ

めた。彼女の抑制のきいたタッチは、たとえば同じ背景をもつ蕭軍『未完成の構図』にくらべて、作品に明るさとリアリティをもたせている。

『南市街』の一篇「餓え」は吟の心象をとおしてある一日を描く。餓えのため、他人の列巴を盗もうとして早朝、郎華が出かけ孤独にとり残された午前。そして午後、恩師とその娘の訪問。生活をしない少女の純潔の前に吟の心は羨望と羞恥にゆらぐ。そしてゆえなくついた嘘。しかし、恩師からの借金もたらしてくれた郎華とのささやかな晩さん、飯館の喧騒が再び生命力をふるいたさせる。

ここに描かれたのは何の特別なこともない、ありふれた一日だ。ささやかな心の波動を告白調の大仰な詠嘆もなく、回想にありがちな美化もなく、しかし、確かに描ききった蕭軍のいう「かけねなしの生活記録」である。ありのままの生活、そして自分自身を、その傷さえもいとおしんでなぞる指の感覚がここにある。そして、これこそが『南市街』の良さであり、魅力である。と私はおもふ。

『史記』と秦始皇陵兵馬俑

曾布川 寛

一九四七年二月、秦始皇陵の東側で巨大な兵馬俑一号坑が発見されて以来、二号坑、三号坑が相次いで発見され、全て発掘すれば、等身大の陶製兵馬俑が七千体以上が出土するものと推定されている。またこれを契機に、陵園付近が徹底調査され、墳丘の西側で、二分の一の縮尺の銅製馬車二輛を出土した銅車馬坑の他、珍禽異獸坑、馬廐坑などが発見されている。

さて、あの龐大な兵馬俑は一体何を表わしているのだろうか。まず兵馬俑を一体一体みて驚くのは、その正確な写実的表現である。兵士の容貌は、大量の群像表現であるにもかかわらず、一体として同じものではなく、雑多な顔がそれぞれ個性をもって丁寧に表現されていた。これは、現実の兵士の地下における再現を目的に、モデルを使って写したに違いない。また兵馬俑は三つの坑ともに、軍隊としての階級、兵種、指揮系統を考慮し、東向きに整然と秩序正しく大軍陣を編成していた。兵士一人一人をモデルに写し取った陶俑を、当時の特定の軍隊の編成通りに配列したのである。

では、特定の軍隊とは、秦のどの軍隊であろうか。全員冑を着用せず、指揮官が冠をつけることや、裝備の立派さからみて、近衛兵であることは容易に想像がつくが、それは指揮官の二種類の冠が、郎官や宮殿門吏がつける鷄冠、却非冠であることによって証せられる。そしてその近衛兵のうちでも、更に軍陣の編成方法、人数、所持する実用武器の種類からみて、一号坑は宮城内を守備する衛士の軍隊、二号坑は車・戸・騎の三部隊に分かれ、宮殿を警衛する郎中の軍隊、三号坑は殳を持ち行列の先払いをする旅賁の部隊と推定される。

「史記」秦始皇帝本紀によると、始皇帝には宮觀や百官などが埋葬されたところがあるが、兵馬俑や銅車馬の御官俑はこの百官に相当しよう。また秦始皇帝本紀には、二世皇帝三年の趙高の陰謀による望夷宮襲撃事件、叔孫通列伝には、漢高祖七年の長樂宮での朝儀の有様が記されるが、そこに登場する衛士や郎中こそ、兵馬俑によって表わされた近衛兵である。そして何のために兵馬俑を設けたかといえば、絳侯周勃世家に、周亜夫が官の甲楯五百具を買って兵馬俑を作り防御しようとしたことが記されるように、地下の世界での防衛のためである。但しこれまでと違い、後漢の蔡邕が陵寢制度を指摘したように、新たに地下の世界が靈魂のすみ

かと考えられたからこそ、兵馬俑を墓の前面に配して防衛する必要が生じたのである。

プルーストのカイエを読む

——一九一三年の

『失われた時を求めて』——

天野史郎

プルーストの小説『失われた時を求めて』には、その出版の複雑な経緯に由来する多くの問題が存在する。とりわけ一九一三年末、第一巻の「スワン家の方へ」出版ののち、第一次大戦により出版が中断したことは決定的な影響を与えた。大戦による中断の間、プルーストは大幅な加筆訂正を行ない、当初の構想を大きく変更してしまったのである。幸いにして小説の草稿が残され、一九一三年以前の小説の構想をうかがい知ることが出来る。カイエと呼び慣わされる草稿には現行版では捨てられた様々のエピソード、登場人物が描かれているが、ここでとりあげるピュトビュス夫人の人間使もそうした登場人物のひとりである。

この女は現行版の読者にはなじみが薄いものの、カイエの中での役割がいますこし大きなものであること

は従来から知られていた。すなわちカイエ47に、主人公がヴェルデュラン家でこの女と会う予定のその日に、祖母が尿毒性の発作をおこすという挿話があり、そこからこの女が、祖母の死の一つの原因となっているとするものである。しかし仔細にながめるとこの通説には疑問が残る。ヴェルデュラン家に行くことは、家族ことに祖母の反対を惹きおこしたとはいえ、既に許されていたことであり、また不調を訴える祖母に日課の散歩を強いるのは主人公ではなく主人公の母であって、主人公はたんにお供をしたにとどまる。小間使への欲望が祖母の死を惹きおこすものとはいささか考えにくく、別のところにこの女の担う役割をもとめられねばならない。

現行版では遂に出会うことのない主人公と小間使だが、カイエでは二人の出会いが設定されている。一九〇八、九年頃のカイエ36にはパリで二人の出会いが描かれるが、そこで女はコンブレ近在の出であり、性に目覚めた主人公が女の姿をもとめてコンブレの近くの森をさまよっていたその頃に、百姓相手に身を任せ、いたことがわかる。小間使との出会いはしたがって、少年の日の性的夢想が実現し得るものであったことを主人公に知らせ、コンブレの過去に主人公をつれもどすという、過去への回帰のテーマをもつものであつた。

た。コンブレへの回帰は一九一一年頃のものとされるカイエ48および50でさらに強化される。ここでは二人はパドヴァで出会いヴェニスで逢引を重ねる。しかしパドヴァの教会にあるジョットーの『悪徳と徳』は、すでに写真でコンブレの少年時より馴んでいたものであり、『悪徳と徳』はコンブレ近在の教会の彫刻にも見出され、さらにヴェニスも、そのビザンツ・ゴシックの建築によりコンブレのゴシック教会に結びつけられる。小間使と主人公の出会いは、このようにブルーストの傾倒したラスキンの中世趣味、ゴシック趣味を色濃くまといつつ、無意志的想起に先立って、コンブレの過去への回帰、さらには文化の源流たるゴシック中世への回帰をうながすものであった。ピュトビュス夫人の小間使はしたがって、『失われた時を求めて』という小説を貫く時間的構築の一端を担う重要な登場人物であったといえる。

古代シュメールの土地制度

——大英博物館粘土板文書から——

前川 和也

古代メソポタミアの楔形文字粘土板をあつかう学問のうち、王宮、神殿、私的大所領の経営のために書か

れた記録——行政・経済文書——を主史料とする分野を、かつてシカゴ大学のゲルプは「タマネギ学」と名づけた。文字どおりのタマネギ類の栽培、収穫を記した一群のテキスト（前三千年紀末）がペンシルヴァニア大学に所蔵されている。西欧では、神話・叙事詩などの文学テキストの研究がさかんであるかわり、ペンシルヴァニア「タマネギ文書」などの行政・経済記録——前出土テキストの九割以上を占める——はともすればなおざりにされてきた。ゲルプは後者の研究をあえて「タマネギ学」と呼び、文学テキストの研究が、楔形文字学のなかで唯一高級な学問であるという西欧学界の一般常識に挑戦したのであった。

さて「タマネギ学」においては、しばしば、一枚の長大なテキストが数百枚の小記録に勝る情報を与えてくれる。当時の書記は、多くの小会計報告をもとにして、年度末に、総括的な会計報告を書いていたからである。したがって、無数の行政・経済文書のなかから、重要と思われる長大なテキストを発見することが、「タマネギ学」研究者の第一の責務である。ときには、欧米の博物館に未公開のまま眠っている行政・経済記録を「発掘」して、この種のテキストを探し出してこなければならない。

そのような長大な総括記録の例として、ここでは

TUT5 および BM 23622 + 28004 をとりあげてみよう。前者は既刊ベルリン博物館テキストであり、後者は大英博物館でわたくしが「発掘」したものである。前者はウル第三王朝時代（前三千年紀末）第二代王治世末にギルス都市のすべての「神殿」が耕作した全直営地についての総括記録である。われわれはこの記録から、当時のギルスにおける直営地経営について、じつにおおくの情報を得ることができる。たとえば耕地は、単位面積あたりに投下した種子量および耕畜大麦飼料の多少によって八分類されている。耕作総面積は二四三平方キロメートルにものぼり、うち九八パーセントは大麦耕地であった。

ところで当時の王宮、神殿などの土地は、収穫がほぼすべて公共収入となる直営地の他に、王宮、神殿ではたらくひとびとに分配した割当地、異なる生産力水準に応じて小作料を徴収する条件でひとびとに貸与した小作地よりなっていた。そしてこれまで、直営地および小作地について、わたくしはいくつかの論考を書いてきたけれども、割当地についてはふれるところはなかった。関連既刊テキストがほとんど存在していなかったからである。そして最近、BM 23622 + 28004 を見出したことによって、ウル第三王朝時代の割当地分配制度をはじめて詳細に論議できるようになった。こ

のテキストは、ギルスの重要な「神殿」のひとつ、ナムカニ「神殿」所領の検地記録であって、直営地、小作地および割当地についての諸情報を書きこまれているからである。このテキストによれば、直営地、小作地、割当地はそれぞれ全耕地の六七、八、二五パーセントを占めていた。そして、ギルスの他「神殿」所領でも、三カテゴリーの土地はほぼ同じような比率であったろう。またこのテキストは、公共奉仕の代償として割当地を与えられるひとびとが、ナムカニ「神殿」の中核的存在であることを、みごとに示しているのがあった。

開所記念講演（昭和六〇年度） 六〇年十一月七日

於 本館会議室

夢野久作『瓶詰の地獄』のウソ

尾崎 雄二郎

標題の小説は四つ下の妹と二人だけ、「一本のエンピツと、ナイフと、一冊のノートブックと、一個のムシメガネと、水を入れた三本のビール瓶と、小さな新約聖書が一冊と」だけをもって無人島に漂着した十一

歳（年令は両方ともたぶん数え年だ）の少年が、漂着直後まず

オ父サマ、オ母サマ。ボクたち兄ダイハ、ナカヨク、タツシャニコノシマニ、クラシテイマス。ハヤク、タスケニ、キテクダサイ。

市川 太郎

イチカワアヤコ

という手紙を書いてビール瓶に入れて流し、何年かの後、今度はもう完全に大人の文章で、無人島にただ二人だけ異性の組合せ同士として置かれたアヤ子との、またアヤ子の、お互いの相手に対する不倫の情熱の苦悩を語り、最後第三番目の瓶には、島を探しあてた両親が、二人を救い出そうと人びとと共に二艘のボートに分乗してやって来るその姿を確認しつつ、もはや両親の目の前に立つことのできない自分たちの現在を告白した手紙を入れ、フカの回游する「深い淵の中へ」、「シッカリ抱き合ったまま」「身を投げて死」ぬ、その三通の手紙が、太郎が海に投げ入れたと恰度逆の順序に発見され、発見した「××島村役場」から「村費にて」「海洋研究所」に、「予てより御通達の、潮流研究用と覚しき」資料として届けられたことになっている。講演者は十一歳の年令で最初の手紙のような文章しか書かない人間が、四つも年下の、したがって一層幼

い言語生活をしか経験していない妹との、大人たちとは隔離された島の生活の何年か後、完全な大人の文章が書けるようになるはずがないと考える。たといその座右に「新約聖書」、これはよくある「詩篇」つきのものだが、それが常にあったとしても、である。人間のことは成長は、成長したことはそれを材料として語られるところの大人のことは、たとえば新約聖書のようなものが脇にあるというだけでは足りない。新約聖書のことばが材料であるためには、それが完全に、あるいは少なくともかなりよく理解されているのであればならない。十一歳の年令であのカタカナの文章をつづった太郎は、恐らく新約聖書を、本人の第二の手紙がいうほどには読むことができなかっただろう。そのときのかれは、久作の死の昭和十一年、講演者十一歳の時に劣るらしい。

お雇い鉱山技師 エラスマス

H・M・ガワの生涯と係累

山 本 有 造

イギリス人鉱山技師エラスマス・H・M・ガワー (Erasmus H.M. Gower) の事蹟については、日本鉱山

史に関する諸書にその断片が散見されるけれども、それらを綴って生涯を語られるほどには有名でない。

慶応二年、旧幕箱館奉行の「お雇い」となり岩内炭坑の開発にあたった彼は、維新後は新政府鉱山司の「お雇い」として佐渡金山の近代化に取組んだ。実弟の駐日領事エーベル・A・J・ガワー (Abel A. J. Gower) の仲介と外商資本の雄ジャーディン・マセソン社 (Jardine, Matheson & Co.) とのつながりが彼の無形の資産であり、旧幕・新政府を通じて「お雇い」の地位を保ちえた主要な要因であった。

しかし明治の新時代は、経験技術師たるエラスマスに優しくはなかった。鉱山大学出の有能な「お雇い」技師が本国から送出され始めるにつれて、彼の「お雇い」としての役割は終わった。その後の約一〇年間、明治一三年離日までの間、彼は一種の技術コンサルタント、機械輸入のコミッション・エージェントとしていくつかの民間会社 (例えば後藤の高島炭坑) を渡りあ

る。自身イギリス人の父とイタリア人の母の混血をうけたエラスマスは、日本に二組の子供を残した。彼が長崎に残した一組 (一男一女) は、若い頃からの友人トーマス・グラバー (Thomas Glover) が後見をつとめ、一女はグラバーの若いパートナー、フレデリック・リ

ンガー (Fredrik Ringer) の妻になった。一男はその後アメリカに渡ったが、「面白からざる人物」になったといわれる。

もう一組 (二男) は東京に残され、エラスマスの佐渡時代に世話になった高田慎蔵 (高田商会主) が後見人となった。次男志保井重要は高田商会に入り、ロンドン支店赴任の途上、イタリヤ、リボルノ郊外に隠栖中のエラスマスに会ってその「思い出」を書き残した。また重要は、高田商会倒産後その整理と新会社の再興に力を尽した。

混血のエラスマスが残した四人の子供たちはそれぞれの人生を歩んだ。イギリス、アメリカ、日本に散った彼らおよびその子孫の生涯は、日本社会と混血の問題を考えるひとつの手がかりにならないだろうか。

初期中世の普遍論争

岩 熊 幸 男

十一・二世紀に普遍に関する論争のあったことは哲学史上に名高い。この論争については、いわゆる実念論と唯名論との対立をプラトン主義とアリストテレス主義との対立になぞらえて解釈されるのが普通である。

この解釈は、しかし、適切ではないことを本講演では示そうと試みた。

中世の普遍論争のきっかけは、ボルフェリオスが『アリストテレス範疇論入門』に未答のままに置いた「普遍は実在するか否か」という問である。この問自体は、古代末期に意識されていた限りでのプラトン・アリストテレス両主義の対立を確かに背景としている。しかし中世の人々はこの問題図式をそのまま受け入れたわけではなかった。なぜなら、ボエチウスがボルフェリオス注釈で、この問に対してアリストテレス主義に基づく(と彼の称する)解答を与えており、中世の人々はそれに従う所から出発したからである。彼らはこの限りで自らをアリストテレス主義者だと考えていて、プラトン主義者ではなかった。アリストテレス主義に関する彼らの知識は殆どボエチウスに依拠し、プラトン主義については断片的にしか知らなかったのである。彼らの考えるプラトン主義を採用した人々も皆無ではないが、論争の中では主要な流れを形成していない。中世の人々が問題を見出したのは全く別の点にあった。ボエチウスは、『範疇論』注釈では、ものではなく言葉がこの書に論じられる対象であると述べたのに対して、『範疇論入門』注釈では、ものが研究対象であるとした。十一世紀中葉に一部の人々はこの二つの

典拠が相矛盾すると考え、ポルフェリオスが論じる対象をもアリストテレスと同じく言葉だとする新説を唱え始めた。それに対して多くの人々はそれをやはりものであると考えた。これがいわゆる「唯名論」と「実念論」の対立の原初形態である。

もの説をとる人々はポエチウスから三つのテーゼ「現実に存在するものは個物のみである」「個物と普遍は同じものである」「普遍は多くの個物に共通であるもの」であるを抽出し、この三つのテーゼを様々なものに組み合わせ中で発展した。言葉説をとる人々は、始めの内はポルフェリオスの間に彼らの原理をうまく適用できないでいたが、やがてペトルス・アバエラルドゥスの手によって、言葉とその意味作用に着目した緻密な理論としてまとめあげられることになる。

退官記念講演

六〇年三月二日
於 本館大会議室

技術史談義

吉田 光 邦

技術史をめぐるわたしの研究生活は、中国明代の技

術百科全書ともいふべき、宋応星の『天工開物』の会読にはじまった。それは永い戦火も収った翌年のことであった。知られるように、『天工開物』は、農業から手工業、鉱業あるいは兵器と全ゆる分野に及んでいる。それらの分野の文献に目を通し、さらにノートをつくる。わたしが今も多くの分野に興味をもち続けるのは、この『天工開物』がきっかけとなったのかもしれない。

それ以後、古代の農業『齊民要術』あるいは各種の工芸技術関係のテキストの会読が、薮内清先生を中心に進められた。しかし技術はものをつくりだし、形と機能を与えるものである。そのためには、現実の技術の実態を知ることが、文献理解の重要な方法となる。

しかしなぜか中国の技術についての、日本人の報告は意外なほど乏しかった。欧人には一九三七年刊のホンメルによる“China at Work”がある。しかし邦人のものとしては北村弥一郎の陶磁、そのほか明治中期の鉱山などの視察報告があるにすぎない。だが当時は中国渡航はまだ夢の夢であった。そこでかなり中国的なものを伝えている、日本の伝統的な手工業技術に視野をひろげた。

一九五六年、はしくもイランを調査する機会を得た。それは日本と自然条件を全く異にし、しかもイス

ラムの世界である。それ以後も二度にわたって西アジアを調査し、さらに東南アジアの各地の手工業を見ることもしばしばとなった。当然に日本や中国との比較の問題が生れる。そしてイスラムの科学・技術の源泉でもある、ヨーロッパ世界の特質への着目となる。そこには鍊金術と永久機関の問題があった。

このふたつはヨーロッパの技術の基本的な思想である。自然は不変のものではなく、人間の操作によってその形相を変化させることができるとの考えは、近代の技術そのものである。原子の人工変換も、それと同じ思想によって与えられているといつてよい。

それに永久機関。一五五六年のアグリコラにはじまって、一五八八年のラメリ、一六一六年のヴェランテイウス、またゾンカ、ベソンと、十六世紀の後半から十七世紀前半には、多くの技術者たちが、多様な機械を考案しその図案をあいひいで出版した。いづれも複雑なメカニズムをもち、それらのメカニズムを当時の技術の加工能力で組み立てることは、まず不可能と思われる類ばかりである。しかし現代の精密な加工になれば、そのメカニズムも成立可能かもしれぬ。つまりそれらは理想機械であつた。加工技術が発展すれば、この複雑なメカニズムも十分に活動すると彼らは考えた。この徹底した機械主義、それはヨーロッパ技術の

特徴である。

加えてこれらの機械が永久に動きつづける方法の探究がある。それは十九世紀の中ごろまで、実に数百年の間ヨーロッパの発明家たちをとらえつづけたテーマである。しかも初期のヴィヤール・ド・オスクールのように、ゴシック建築のメイスンであつた人物が、一方では何日間も仲間と議論して、永久機関のデザインを試みていた。この永久機関への熱意は、東洋にはみられぬ技術の流れである。

そこには労働観の反映がある。彼らにとって労働は、神から課せられた苦勞であつた。その苦勞から逃れるために、彼らはさまざまなエネルギー源を利用し、機械に労働を肩代りさせることを求めた。今日の原子力利用も、永久機関の思想の上にある。

そうした技術を日本は十九世紀の後半から熱心に受け入れることになった。その技術は必然的に工業化への歩みとなる。いわゆる日本の近代化である。しかもその技術はもの生産のみならず、情報分野にまで及んでいた。それは日本の精神文化をも含めた、新しい社会と文化構造の要素となった。

おくりもの

。一九八四年度の財団法人人文科学研究協会助成金は、飛鳥井教授の推薦により元朝日新聞記者後藤孝夫氏におくられた。

（一九八五年三月七日）木 於 本館応接室、出席者 吉田所長・藤枝名誉教授・飛鳥井教授・藤井助教授・園田助手

。林 已奈夫教授は昭和六〇年度日本学士院賞を日本学士院公館で受賞した。（一九八五年六月十日）

。林屋辰三郎名誉所員は勲二等瑞宝章を受章した。（二月三日付）

。林屋辰三郎名誉所員は京都市文化功労章を受章した。（二月五日付）

人のういき

。Peter Francis Kornicki 助教授（日本部）は辞任（一九八四年二月一日付）。

。吉田光邦教授（日本部）は、停年退官（一九八五年三月三十一日付）、京都大学名誉教授に（四月一日付）。

。柳田聖山教授（東方部）は、当研究所長

に併任、附属東洋学文献センター長を併任。

。小野和子助教授（東方部）は、三重大学人文学部教授に昇任。

。平田昌司助手（東方部）は山口大学人文学部助教授に昇任。

。曾布川 寛京都市立芸術大学講師を助教授（東方部）に採用。

。矢淵孝良助手（東方部）は、金沢大学教養部助教授に昇任。

。田中 淡助手（東方部）は、助教授に昇任。

。江田憲治氏を助手（東方部）に採用（以上四月一日付）。

。岩見 宏神戸大学文学部教授は併任教授に、井上輝夫慶応義塾大学経済学部助教授は非常勤講師に（比較文化研究部門一九八五年四月一日～八六年三月三十一日）。

。天野史郎助手（西洋部）は、講師に昇任（四月一六日付）。

。園田英弘助手（日本部）は、国立民族学博物館助教授に昇任。

。狭間直樹助教授（東方部）は、教授に昇任（以上九月一日付）。

。富谷 至助手（東方部）は、大阪大学教養部講師に昇任（一〇月一六日付）。

。林 武実氏を助手（東方部）に採用。

。三浦秀一氏を助手（東方部）に採用（以上十一月一日付）。

。小野和子助教授（東方部）は、一九八四年十二月一日伊丹発、北京の第一歴史檔案館、上海圖書館及び常熟圖書館で清代檔案の研究をし、同月三十一日帰国。

。浅田 彰助手（西洋部）は、一九八五年一月二六日成田発、パリの高等師範学校で講演、コロンビア大学で「経済学と記号論」に関するセミナーに参加し、二月一六日帰国。

。狭間直樹助教授（東方部）は、三月二〇日伊丹発、涿県の桃園飯店で孫中山研究述評国際學術討論会に参加し、四月三日帰国。

。甚野尚志助手（西洋部）は、三月二七日伊丹発、ケンブリッジ大学、フランス国立図書館、ケルン都市文書館等で文献資料の収集を終え、四月三日帰国。

。麦谷邦夫助教授（東方部）は、五月五日伊丹発、上海社会科学院、金山寺等で茅山道教遺蹟調査を終え、同月一六日帰国。

。梅原 郁教授（東方面）は、五月二一日成田発、杭州大学で中国宋史国際學術討論会に参加し、同月二一日帰国。

。多田道太郎教授（西洋部）は、五月二〇日伊丹発、ラトロップ大学でオーストラリア日本研究学会に出席し、オーストラリア国立大学等で日本研究に関する學術交流を終え、同月三一日帰国。

。藤井讓治助教授（日本部）は、ハーバードイェンチン研究所の客員研究員にえらばれ、六月一八日成田発、同研究所で日本近世史に関する研究をし、一九八六年六月一四日帰国予定。

。村田裕子助手（東方面）は、七月一〇日成田発、北京大学で東北作家研究に関する資料収集を終え、八五年四月五日帰国。

。谷 泰教授（西洋部）は、文部省海外學術調査隊（阪本隊長）の一員として、七月一四日伊丹発、インド高等研究所、クルール周辺、ジェイプル周辺等で、インド亜大陸における雑穀栽培とそれをめぐる農牧複合の研究を終え、一〇月二三日帰国。

。竹内 実教授（東方面）は、京都大学創立七〇周年記念後援会助成金で八月二六

日成田発、中国社会科学院、中日関係史研究会、北京大学、パリ大学の当代中国資料センター、モスクワの科学アカデミー極東研究所で、現代中国の開放政策の実態調査及び意見交換を終え、一〇月一五日帰国。

。細川弘明助手（西洋部）は、八月二七日成田発、オーストラリア国立大学太平洋地域研究所、パプアニューギニア大学、マウントハーゲン周辺でオーストラリア原住民社会の言語社会学的研究を行ない、一九八七年八月二六日帰国予定。

。杉山正明助手（東方面）は、九月二三日伊丹発、内蒙古大学社会科学学院情報研究所、遼寧省民族研究所等で内蒙古における歴史と文学に関する學術交流を終え、一〇月一八日帰国。

。宮路法子助手（東方面）は、一〇月一一日伊丹発、南京博物館、浙江省博物館等で中国絵画の調査及び資料収集を終え、十一月八日帰国。

。横山俊夫助教授（日本部）は、一〇月一三日成田発、ロンドンの王立国際問題研究所でアジア・太平洋セミナーに出席、オックスフォード大学セント・アントニ

ーズカレッジ等で日本研究動向についての情報収集を行ない、同月二一日帰国。

。曾布川寛助教授（東方面）は、一〇月一六日伊丹発、雲崗石窟、龍門石窟、鑿堂山石窟、兵馬俑博物館等で中国美術の調査及び資料収集を終え、十一月五日帰国。

。竹内 実教授（東方面）は、十一月一日伊丹発、台湾国立中山大学で孫中山先生及び近代中国學術討論会で討論し、同月八日帰国。

外国人客員教官

（比較社会交員部門）

。Françoise Sabban フランス社会科学高等研究院主任研究員

中国、フランスにおける食事文化の比較研究
受入教官 中村教授

期間 一九八五年七月一五～一九八六年一月一四日

（日本学交員部門）

。嚴紹璽 北京大学古文獻研究所副所長
日中交渉史に関する研究

受入教官 竹内教授
期間 一九八五年六月五日～同年九月

三〇日

。Cornelius Ouwehand チューリッヒ大学
東アジア学科主任教授

一九世紀日本の辺境部における行政と
民俗のかかわりについての研究

受入教官 横山助教授
期間 一九八五年一〇月一日～一九八
六年一月六日

外国人研修員

。Robert Sharf ミシガン大学院生

禅宗の初期の発展について

指導教官 柳田教授
期間 一九八五年四月～一九八七年三
月

。Fabrizio Pregadio イタリア東洋学研究
所研究員

唐代の道教 指導教官 麥谷助教授
期間 一九八五年七月～一〇月

。Evelyn Meani バリ第七大学院生
蜀国宗教絵画の研究

指導教官 荒井教授
期間 一九八五年七月～一九八六年三
月

。Susan Cherniack エール大学院生

杜甫研究 指導教官 小南助教授

期間 一九八五年八月～同年一二月
。App. Urs Erwin テンプル大学院生
雲門文偃禪師の教え

指導教官 柳田教授
期間 一九八五年一二月～一九八六年
三月

。James Victor Stokes ケンブリッジ大学
院生

馬祖録の研究 指導教官 柳田教授
期間 一九八五年一二月～一九八六年
三月

招へい外国人学者

。Wm. Theodore deBary ロンビア大学
教授

宋明思想史の研究 受入教官 磯波教授
期間 一九八五年二月七日～同年七月
二六日

。楊国祜 厦門大学歴史研究所副所長
「国民革命の研究」「明清時代の国家と
社会」に参加 受入教官 狭間助教授

期間 一九八五年四月二日～同年七月
九日

。楊天石 中国社会科学近代史研究所副研
究員
「国民革命の研究」に参加

受入教官 狭間助教授
期間 一九八五年五月一四日～同年七
月二日

。Monika Uebachs チュービンゲン大学東
洋研究所員

宋代地方政治の研究 受入教官 梅原教授
期間 一九八五年一〇月二日～一九八
六年二月二八日

。Mauricio Taddei ナポリ大学東洋学文
学部教授

インド・中央アジア接触地域における
仏教圖像の研究 受入教官 桑山助教授
期間 一九八五年一〇月二〇日～同年
十一月一七日

外国人共同研究員

。Reinhard H. Emmerich ハンブルグ大学

研究員

漢代文化の研究―馬王堆帛書による―

受入教官 麥谷助教授

期間 一九八五年五月七日～一九八七

年四月三〇日

東洋学文献センター講習会

。一九八五年度 漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）

第一日（六月一七日）

漢字のデータベース（講演）（京大教授

大型計算機センター） 星野 聡

東洋学文献類目の編纂とフォーマット

（講義） 井波陵一、都築澄子

第二日（六月一八日）

東洋学文献類目の計算機処理（一）

（京大技官大型計算機センター）

村尾義和、河野 典

東洋学文献類目の計算機処理（二）

（京大技官大型計算機センター）

樋谷猪久夫

第三日（六月一九日）

計算機入門（講義）（京大助教授大型

計算機センター） 島崎 眞昭

第四日（六月二〇日）

情報検索（講義）（京大助手 大型計

算機センター） 渡辺 豊英

コンピュータ・ネットワーク（講義）

（京大講師大型計算機センター）

飯田 記子

計算機の入出力（講義）（京大助手

大型計算機センター） 金沢 正憲

第五日（六月二一日）

東洋学文献類目と漢籍目録の電算化

（講義） 勝村 哲也

質疑応答

。一九八五年度 漢籍担当職員講習会（初

級）

第一日（九月三〇日）

中国の書物（講義） 尾崎雄二郎

経部書（講義）

（京大助教授文学部） 池田 秀三

参考書誌解題 沼沢 博

第二日（一〇月一日）

史部書（講義） 井上 進

目録法（講義） 田中 久子

実習

第三日（一〇月二日）

子部書（講義） 井波 陵一

実習

第四日（一〇月三日）

集部書

実習

第五日（一〇月四日）

新学書

実習

第六日（一〇月五日）

質疑応答

狭間 直樹

小南 一郎

講演会

。一九八五年五月二〇日 於 本館二階大

会議室

日本・中国・ヨーロッパの近代化

プリンストン大学教授

マリオン・J・リーヴィー博士

文人趣味をめぐる

——江南文人の研究班——

旧中国の江南地方に生きた文人たちの芸術的、文化的生活について、精神的・物質的の両面から、その研究の可能性を模索する。およそこのような意味合いをもちながら、この研究班は発足した。平たくいってしまつと、文人趣味ということばで括ることのできる範疇を想定したのだが、研究の主題が主題だけに、ことによると拡散的になる危惧もはないというわけで、二年という暫定期間を限った、遠慮がちな開幕であつた。文人趣味ということばは近代の日本語であるが、具体的には、通常、文房清玩、書画骨董の類を指す。いままでにも、この種の対象をとりあげた研究に、青木正児、中田勇次郎両先生によるものなどがあるといえ、すくなくとも一部にそうした研究したいを余技的なものとみる向きがあつたことは否めない。あえて文人を主題に掲げ、文人趣味を研究対象とする共同研究班を組織するのはおそらくかなり勇気のいることだつたらうとおもわれるから、まずは荒井班長の英断に敬意を表しておきたい。

いま文人趣味という語を用いるかどうかはべつとしても、文房清玩の類のみならず、じつさいはもっと幅広い日常生活の全般にわたる範囲を視野に入れて考えてゆく必要があるだろう。一般に、文人趣味は宋代に成立し、高潮をむかえたのは明代であつたと理解されている。わが班が当面の輪読のテキストに採用しているのは、明代末期の代表的な文人・文震亨の『長物志』であるが、その十二巻の内容をみて、室廬・花木・水石・禽魚・書画・几榻・器具・衣飾・舟車・位置・蔬果・香茗というように、衣食住、書画骨董、日用器物などを広範にあつかひ、それぞれの雅俗、優劣について、かなり個性的に、というか、自分の好惡のままに、品評を下したものである。これらの日常生活を彩ったさまざまな事物をも含めて、その文人的教養がすでに広闊な領域を蔽っている以上、われわれにもまた、それに対応しうるような素養が求められることになる。もっとも庭樹や蔬果、石の品種の専門的な同定などは、文人趣味からはおよそ遠くおもえるから、とりあえず深く立ち入らないほうが無難か。それはともかく、幸い中国文学の専門家はもとより、中国語学・東洋史・日本史・仏文学・科学史など、多彩な分野の班員はいずれも博学の士で、文人趣味について、実践となると若干問題はあるかもしれないけれど、それ

ぞれ相当に頼もしい。

準備的な二年はやくも終息した。わが班の前途は洋洋、とまではいわないけれども、文人の生活についての研究の方法論に、すこしずつ視野が開かれつつあるようにおもえる。

(田中 淡)

啓蒙期政治思想と

空間の適正規模

——一八世紀ヨーロッパの空間認識班——

そろそろ共同研究のマトメのときが近づいてから、熟知のはずのこのついで忘れていた側面を思いだすことがある。一八世紀の空間認識における「一般」がそれである。

ルソー政治思想の中心概念の一つ、「一般意志」は、デイドロの所論への批判をふまえていた。『フランス百科全書』第五巻所収の項目「自然法」でのデイドロの定義そのものに異論はないが、一般意志が自然状態で形成されたとすることに、ルソーは賛成できなかった。この対立点は時間とかかわってのものだが、空間ともかかわっていたことが忘れられやすい。

ルソーが自説を展開した『ジュネーヴ草稿』第一篇

第二章に「人類の一般社会について」の題をつけたことでも明らかのように、一般意志の主体がデイドロでは人類であるのに対し、ルソーでは国民であった。法を一般意志の表現とするルソーの立場にそって言えば、デイドロにとっては一般意志を表現するのが「自然法」、ルソーにとっては「国法」であったのだ。

このことは、『百科全書』の主幹が近代自然法の正統から離れず、『社会契約論』の著者がその異端に走ったことと無縁ではない。また、もう一人の異端モンテスキューにとっての中心概念「一般精神」が国民とかかわるものであったことも想起されねばならない。さらには、『法の精神』の著者にとっては現状の理解がまず目ざされたのに対し、先の二人にとっては現状の批判に力点があったことも忘れてはなるまい。

それにつけても、レヴィンが創唱しサルトルが祖述した「ホドロジー的空間」という概念が思いだされる。要約していえば、人間の生きる空間は、欲求とその目標はさまざまであり、したがって目標の到達可能性もさまざまで、それらに規定されて、幾何学的な方向や距離とは異なる多様な空間がありうる。したがって、多様な「適正規模」が存在しうることにのみならず、一八世紀フランスの先の三思想家が何を「一般」的とするかの異同にも、それがあらわれたと言ってよからう。

こうしたことの中にまとめの一つの方向を求めていると思うが、ともあれ、こうした空間認識がフランス大革命の一前提でもありえたるうし、また革命をくぐり抜けることによって、一九世紀のあの時間認識Ⅱ歴史認識の成立に寄与したろう、といった展望ももちつつ、作業を進めることとしたい。(樋口 謹一)

一九世紀の文明史的研究

——一九世紀の文明史的研究班——

ビデオテープを早送りすると、画面の中に重々しく佇んでいた人も、めまぐるしく挙動し金切声を出す。そういえば、バッタもあのように間断なく左右の翅をきしませ、ハエも前後の足を揉みあわせたり、首をせっかちに廻すではないか。

人類の歴史において、一九世紀とは、人の節足動物化がはじまった時期かもしれない。産業革命に続く情報技術の革新は、生産労働や衣食住の消費はもとより、医療や教育、刑罰や褒賞、儀礼や信仰など、社会生活の数々の側面に、規格化、大量化が進み、大都市に集まる人々は、次第に等質の存在として、間断なく依存し模倣しあう壮大な国際ネットワークを構成しはじめ

るのである。

ただ当事者たる人間のアタマは、このような世界に引き込まれながら、新たな認識体系を獲得できない。技術自体が権威のパロディー化や階級差縮小、国民国家解体を可能にしはじめていたこの時代に、強く蘇ってきたのは、古い宮廷や騎士の文化であり、それにより諸民族は地球規模の位階制に再編された。彼らが互いに執着した差違弁明の諸観念と、現実化しはじめた高度の相似との共存は、バッタの美人(虫?) コンテストや合唱コンクールを想起すれば判りよい。

交通、通信の高速化も、人間の知見を必ずしも拡げるものではない。大量に出版された旅行者たちの外国見聞の相似を見よ。たいていのハエは、羽化後その活動範囲を飛躍的に増しても、幼虫期と同じように雲古をめがけ続けるのである。

産業革命以来、人類社会は、神々を畏れて成り立っていた従前の文明の破壊に大きな力を発揮し続けているものの、安定した文明を生み出すには、程遠い所にいる。それはなぜか。

ひとつには、一九世紀が生み出した新環境を冷静に把握するための、知的努力が少々足らぬということか。現代の人文科学は、一九世紀の変動の渦中にあった当事者たちの意識や価値観に負うところが多すぎるのであ

共同研究の話題

る。

この班では、一九世紀とは何であったのか、というテーマのもとに、各人が得意とする領域から試論を出し合っている。班員に求められているのは、ヒトやサルを見る眼よりも想い入れの少ない、ムシを見る眼を培うことではないか。いっそ「バッタ・ハエ研究班」と看板を替えては如何？

(横山 俊夫)

お 客 さ ま

一九八四年一月四日

中国日本研究者代表団

団員 (遼寧大学日本研究所) 任 鴻 章

〃 (吉林社会科学院日本研究所) 解 学 詩

〃 (東北師範大学外国問題研究所) 刘 春 英

〃 (天津社会科学院日本研究所副所長) 王 金 林

〃 (中国社会科学院日本研究所) 楊 艳 艳

一九八五年三月二七日

北京大学長

丁 石 孫

中国教育部外事局総合処 副処長

王 蘊 忠

四月五日

パリ国立科学研究センター研究部長

Marianne Bastid-Bruguère

四月一日

中国社会科学院代表団

団 長 (中国社会科学院秘書長) 梅 益

副団長 (史研究所名譽所長) 劉 大年

団 員 (史研究所所長) 林 甘 泉

〃 (研究所員) 楊 向 奎

〃 (研究所員) 孫 祚 民

秘 書 (外事局弁公室総務組長) 林 華 雄

通 訳 (外事局アジア・アフリカ処職員) 解 莉 莉

四月一七日

中国国際交流協会

同 陳 殿 棟

五月四日

中国社会科学院「郭沫若手稿収集」代表

団中国社会科学院歴史研究所副研究員 黄 烈

李侃

陳章太

イタリヤ中東極東研究所

金德泉

V. S. Miasnikov

Eva Apór 夫妻

Mechthild Leutner

寐子英

麻子英

中国社会科学院日本研究所副研究员

張 光佩

十一月二四日

一〇月一二日

中国社会科学院哲学研究所所长

邢 賁思

中国社会科学院文字改革代表团

語言文字応用研究所研究员

周 有光

研究员

盧 恩

上海市哲学社会科学学会聯合会主席・教授

羅 竹風

〃

曹 景元

中国文字改革委員会宣伝推广部主任・副研究员

陳 乃華

〃

滕 顯

中国文字改革委員会漢字処処長・副研究员

傳 永和

〃

林 增平

(通訳) 中国社会科学院外事局亜非処職員

李 亡

十一月二日

湖南師範大学長

林 增平

中国文字改革委員会漢字処処長・副研究员

傳 永和

十一月一日

日中仏教学術会議出席者一行

任 繼愈

中国社会科学院世界宗教研究所名誉所長

杜 繼文

中国社会科学院世界宗教研究所名誉所長

方 立天

中国人民大学哲学系教授

樓 宇烈

北京大学哲学系副教授

楊 曾文

中国社会科学院世界宗教研究所仏教研究室主任

ノーベル財団関係者一行

オスロー大学教授

Francis Seyersted

十一月一日

上海交通大学副学長

上海交通大学副学長

劉 克

十一月一日

上海交通大学副学長

劉 克

上海交通大学副学長

劉 克

十一月一日

上海交通大学副学長

劉 克

旅

殷墟への旅、殷墟からの旅

小南 一郎

一九八五年秋の「殷墟筆会」は、河南省安陽市の主催で開かれ、私もそれに参加して論文を一つ読んだ。安陽市が開いたということもあって、「筆会」は書家のあつまりという性格が強く、古文学の研究者の中には不満も無いわけではなかったようである。また外国からの参加者が一つに纏められていて、中国の学者と交流する機会が少ないので、せめて食事は一緒にしたいとアメリカの歴史家たちが強く要求していたのも、残念ながいれられなかった。

たしかに学術交流の場としてはいささか問題があったかもしれないが、安陽市側の接待は周到で、殷墟遺跡を小屯から大司空村のあたりまで参観した（別に最後の日には、私一人のためにマイクロバスを出してくれて、小屯村を半日かけて見る事ができた）ほか、浚県への遠足があり、それにどうしたわけか人民解放軍の駐屯地へ案内してくれて、その司令と会ったりもした。

ただ、当然のことではあるが安陽市の配慮を受けられるのは安陽市近辺においてのみであり、入国した上海から安陽までとその帰路との旅程は、交通機関や宿舎を自分でさがす「自力更生」の旅とならざるを得なかった。そうしてホテル事情がよくない上に、旅行社も一人旅の者にはあまり親切でなく、明日はいずれこの町へ泊るやらおぼつかないといった、いささか苦難の旅となった。

帰途は武漢を経て上海へもどったのであるが、武漢から上海への航空券は予定の日のものが買えず、やむを得ず日本への飛行機が出る前日の夜おそくに上海に着く便に乗った。武漢の旅行社の言う所では上海のホテルには空き部屋が一つもないとのことで、上海空港に隣接するトランジットの旅客のためのホテルに行ったが、ここもいっぱいであった。しかしここで見棄てられては路頭に迷うことになるので、どこでもいいから泊めてほしいとがんばったところ、従業員の休息室で一夜を過ごすことができた。夜明け方、早番の女性の服務員がやって来て、私が寝ているのを見てギョッとしてとび出していった。あとで見るとベッドの下には女性の靴がほうりこんであり、どうも彼女の昼寝用の寝台であったようである。

以前にも、これも一人旅であったが、広州の空港で、航空券は購入してあるのに座席がないと言われて困ったことがある。しかしその時にもなんとか飛行機に乗るこ

とができた。たしかに中国の体制は個人での旅行にはむいておらず、また横の連絡の悪さもあつて、時々思いがけない困難に出あう。しかしそれを補うに足る人々の親切があるように思うのであるが、それは外国人という自分からの甘えなのであろうか。

イスタンブール再訪

前 川 和 也

一九八四年九月末、またイスタンブールにやって来ました。七二年に三カ月と少し、八〇年には約二週間、この街にいたことがありますから、約五カ月のこんどの滞在期間中、十二年の歳月がイスタンブールをどのように変えたかを、たえずみせつけられることになりました。

イスタンブールに到着して、妻、娘とともに空港からホテルのあるベシクタシュまでタクシーを走らせたとき、到着前に抱いていたイスタンブール感傷旅行とでもいった気分は、たちまちどこかへ吹っこんでしまいました。最新設備をほどこした新空港がちょうどオープンしたばかりでし、タクシーにはいまやメーターがつき、しかもちゃんと動いています。また市街を貫通して

アジア大橋に接続する高速道路も、もちろんわたしにとって新しいものでした。

ベシクタシュは、ボスボラス海峡沿いに少し北東に入ったヨーロッパ側地区です。十二年前は、地区にはまだ、郊外といった雰囲気がかっていました。街の小路で羊群をみかけたこともあります。けれども一九八四年のベシクタシュは、様相がまるで変わっていました。地区中心部はいまや、向いのアジア側地区、そしてさらに北へ広がったヨーロッパ側住宅地区と、市の中心部とを結ぶ大ターミナルとなり、人と車があふれています。

ホテルの三ベッド室の値段は一日八千リラ（十六英ポンド）、シングル・ルームで四千リラでした。十二年前とくらべてちょうど百倍、四年前よりも数倍は高くなっています。他のすべての物価も、この程度の値上りぶりでした。

約一週間のち、われわれはベシクタシュの宿をひきはらい、ガラタ橋に近いシルケジ地区のホテルにはいりました。イスタンブールでもっとも古い地区で、商人、手工業者の街です。このホテルで約三週間生活するうちに、古い、かつてのイスタンブールがふたたびわたしの前にあらわれてきました。けれども、古い、狭い道路は車のために絶えず渋滞するようになりました。イスタンブール銀座には、四年前には考えられなかったほど、西

欧からの商品があふれていますが、夜になっても商店の二、三階には灯をあまりみることができません。物価上昇、高家賃に音をあげた住民たちが、アジア側地区に居を移してしまつたからです。古いイスタンブールは、七〇年代の社会的激変に対応することができずに、悲鳴をあげつつけているように思われます。

中国旅行の醍醐味

曾布川 寛

近年、中国を旅行すると、国をあげての「近代化」騒動に、普段あまり縁の無い我々も時に捲き込まれる。三カ月前にオープンしたばかりの近代的なホテルの天井から、突然水が落ちてきて、その挙句エレベーターが止まつたり、或はまだ完成していないホテルに入れられて、朝起きたら断水といった騒ぎである。また「近代化」のスピードに時刻表が追いつかないのか、到着時刻も知らされずに、列車に乗り込んだりする。

しかし中国旅行の醍醐味が、この程度のことで薄れるというわけでもない。寧ろ少々騒動に悩まされた方が、味も増そうというものだ。その醍醐味とは、旅の途中で時折出合う景色である。だが出合いにはタイミングが

きもので、こちらの都合もあれば、あちらの都合もある。前回よかったからといって、今回もよいという保証はない。また人が感激したからといって、自分も感激するといふものでもない。それでも一回の旅行に、三、四回の出合いがあるうか。以下は昨年の場合である。

まずは山西太原の天竜山石窟を訪れた時。岩山の頂き近くにある石窟の見学を終えて、麓の聖寿寺へと急な坂道を下りながら、ふと振り返って山頂の方を見上げると、青い乾いた秋の空にちぎれ雲が浮かび、灌木の濃い緑と石窟の開かれた砂岩の岩肌が、西陽を受けて鮮やかに照り映えていた。先日の水曜会で、山田慶児氏が柳田聖山氏の「語録の歴史」を書評して、「青い山には、妙にちぎれ雲が似合う」という「祖堂集」の一節が特に印象深かったと述べた時、この景色を思い出していた。立ち去り難くみとれていたものだ。

次は安陽から鄭州へと列車で向い、鉄橋の上から黄河を見た時。小雨が降っており、泥沼のような砂洲に葦の生えた光景に、これは何だと思ったが、本流に及んで、垂れ込めた雲の下に広がる一面の泥の海には、驚嘆の一語であった。真下をのぞくと、長雨で増水した水は、まさにドロドロであった。改めて翌日、開封で黄河を見に行つたが、既に晴上って広いだけの黄河には、何の感興もなかった。

三つ目は登封から洛陽に向い、僂師で洛水を渡ろうとした時。この辺りは土地が平坦で、平らに広がる緑の沃野の向こうに、洛水が淡くかすんで流れていた。華北の荒々しい風景ばかり見てきた眼には、これは何にも替え難い一服の清涼剤であった。こうした景色に出会うと、博物館の狭い一室で山水画を見ているよりマシだという気がしないでもない。

「本のうわさ」のうわさ始末

「本のうわさ」を依頼する時は、「随想」や「旅」を依頼するときよりも気が重い。受ける側もけっして楽しいものでないらしく、淡面をされたことも少なかった。もちろん、「これは私がやりたい」と申し出られたこともあるが、こういうことは稀で、無理して書いてもらったあげくに軽妙しかし核心をつかんだ評でないとか、くそまじめで面白くないとか、「本のうわさ」のうわさがきこえてくる。考えてみると、他の欄はすべて自分の「想い」、自分の「話し」、自分らの「働らき」、自分の「公表」についての語りなのに、この欄だけは、身内の他人について語ることが求められている。言語は、世界のすべて（パッタから天皇まで、先史から現代まで）について、無限定の他人に語りうる。所報「人文」を身内の所内報だと規定すると、それなりにふさわしい欄なのだが、所外の人々にも見てもらおうのなら、そのやり口があまりに内輪すぎる。こういうことが、「本のうわさ」欄へのアンヴィ

バレントな態度の原因なのかもしれない。

こんなことを思って、アンケートをした結果は次のようなものだった。回収枚数二七、うち

1、従来のままの形式で続ける……………四

2、書評者として適当な人がいれば（著者の意見を聞いて）所内外を問わず、三、四千字程度で書評してもらう……………二

3、「本のうわさ」欄は全廃する……………一〇

4、その他（御意見あれば）という部分で所報「人文」を全廃にする、という意見を出した人が五人あった。しかもこの意見を出された人は、（3）の意見を主張した一〇人中にすべて含まれていた。全体を否定することは、部分を否定することを含意する。当然のことだ。その他に、「学外からの研究班員に、積極的にエッセイを書いてもらっては」という意見のほか、「所内書評会を再活性化する」「一、二篇でよいから所内外からコクのある書評をもっと長目に書いてもらおう」「お茶をにごした様なものは編集委員の方でボツにするくらいの裁量をもて」、本来、「所内報として内部の者同士の研究活動を理解するためのもの、という原則は捨てずにおくべきで、もしそれを捨てるなら、廃刊にする方がよい。外部の人がまじめに書評する意味はあまりなく、もっと簡単に、しかも網羅的にしては」といった意見を、いく人かの人が、それぞれの立場から表明していた。

以上「本のうわさ」のうわさ始末記である。どう処理するか、今後考えていただくこととして、一時「無」にすることで「有」の姿を見なおす契機にしておこうと思って、今号は「本のうわさ」は休んで、「本のうわさ」のうわさ、を流させてもらった。

書いたもの一覽

一九八四年十二月
一九八五年一月
(五十音順●印は単行本)

・浅田 彰

ヴァレラと遭遇する
ポストモダン・サイエンスの条件
現代思想 一二月号
中央公論 一月号

●ヘルメスの音楽

筑摩書房 一月

●共編著・GSハゴダール・スペシャルV

ノン・オブ・ティカル・オブ・ティカル
美術手帖 三月増刊号

討論・社会科学における求心と遠心
理想 四月号

書評・宇野邦一「意味の果てへの旅」
中央公論 五月号

砂漠のボツス
六月の風 六月号

●編・森毅対談集「世話囃数理巷談」

平凡社 六月

舞踏するセリ

フロマンジェ展カタログ フジテレビギャラリー 七月

●共著・脳を考える脳

朝日出版社 七月

討論・アイロニーの終焉
現代思想 八月号

書評・柄谷行人「内省と逆行」
群像 八月号

ヴェネツィア・ノート
現代思想 九月号

討論・線と色彩の旅
ユリイカ 一〇月号

クレイ・クリスタル
「クレイ」集英社 一〇月

●共編著・GSハ千のアジアV

冬樹社 一〇月

●共著・ダブル・バインドを超えて

南想社 一一月

・赤松 明彦

Dharmatara の Apoha 論再考—Jāṇasrīmītra の批判から—
印度仏教学研究 33—1 一二月

Ślokavartika, anumāna 章の研究 (II) (共著)
インド思想史研究 3 二月

・飛鳥井 雅道

「傲慢な爪立ち」と意識化された「方法」
文学 一月号

大正アナーキズムの一側面
歴史公論 一月

近代初頭、京都被差別部落の生活(座談会)
こべる 一一二月

維新史のなかの坂本龍馬(「坂本龍馬読本」所収)
新人物往来社 二月

愛媛新聞 二月一五日

国民文化と「愛媛県」の成立
現代の理論 三—十二月

すめろぎ変奏曲 一—九
新潮 45—四月

無隣菴にみる明治元勲の美意識
世界 四月

日本近代化論の新展開
猪名川町 四月

●猪名川町歴史年表(共編)
さろん日本文化 五月

円朝と円遊
エコノミスト 八月二七日

天皇の存在が強化されるとき
岩波書店 一一月

●文明開化

●新修大津市史第八卷（共編）

「毒婦」と「孝子」

灯籠と開化

「明治・大正」の意味と天皇の權威（「口笛と軍靴」所収）

社会評論社 一二月

・荒井 健

二つの庭

颯風 一八号 二月

・井上章一

すっぱい建築家

京大建築会会報 一二月

●靈柩車の誕生

靈柩車が語りかけるもの

粗雑な取るに足らない歴史綱

モダニズムをこえて

法廷にのぼった靈柩車

●図説万国博覧会史（共編）

東照宮の近代 吉田光邦編「一九世紀日本の情報と社会変動」

京大人文研 三月

大情報

Journal

あつめて、ならべて、かざること——靈柩車再考——

季刊人類学 六月

桂離宮と名所案内

Time Out

設計カタログ 七・八月

靈柩車と桂離宮のあいだ

中央公論 八月

資料紹介—葬祭史関係文献・鈴木勇太郎著「回顧録」など

技術と文明 九月

書評—御厨貴「首都計画の政治—形成期明治国家の実像—」

史学雑誌 九月

新刊紹介—村松伸「中国建築留学記」

華麗なる送りの壮嚴

建築史学 九月

日本文化と東照宮

BRUTUS 一〇月

プロレス通信（一）（二）

一心 TASUKE 一〇・十一月

・井上 進

復社の学

東洋史研究 四四卷二号 九月

・宇佐美 斉

フローベールと落日（上、下）

言語生活 一二月、一月

ボードレールと落日（上、下）

言語生活 二月、三月

落日の映像

言語生活 五月

トリュフォー「口曜日が待ち遠しい」

（洋画時評）

清岡卓行著「初冬の中国で」をめぐって

映画新聞 五月

夕映えと薄明の映像

詩学 六月

デュラス「インディアン・ソング」

（洋画時評）

言語生活 七月

落日の火心

映画新聞 八月

ある日の詩人（清岡卓行全詩集）折込

言語生活 九月

思潮社 一〇月

喪失あるいは葬送の歌

言語生活 一一月

・梅原 郁

●宋代官僚制度研究

同朋舎 三月

宋代胥吏制度の展開 堀川哲男編「二〇世紀以降二〇世紀初頭に至る中国社会の権力構造に関する総合的研究」 三月

・小南 一郎

中山王陵三器銘とその時代背景

「戦国時代出土文物の研究」

京大人文研 三月

水底の都市 — 罪の伝承をめぐって —

世界口承文芸研究 (大阪外国語大学) 第六号 三月

魯迅「唐宋伝奇集種辺小綴」(翻訳と解説)

「魯迅全集」第二二冊 学習研究社 八月

大地の神話 — 鯀・禹伝説原始 —

古史春秋 第二号 八月

・阪上 孝

窓ガラス職人とルソーの対話

図書 六月号

●一八四八 国家装置と民衆 (編著)

ミネルヴァ書房 九月

ヨーロッパ一八四八年革命の視点 読売新聞夕刊 一〇月一日

・佐々木 克

近江自由懇親会の周辺

滋賀近代史研究 創刊号 一二月

書評・「宇治市史年表」

週刊読書人 二月一日

戦時生活の日記から

関城町の歴史 五号 三月

幕藩制の崩壊と維新政権

「茨城県史」近世編 三月

天狗西上の道

みち 六二 七月

・甚野 尚志

クリオとエクリチュール—鼎軒・三叉の歴史記述—「一九世紀日本の情報と社会変動」 京大人文研 三月

書評・ル・ロワ・ラデュリ著 (樺山他訳) 「新しい歴史」(歴史人類学への道) 季刊人類学 一六巻一号 三月

ジョン・オヴ・ソールズベリーの政治社会論 人文学報 五八号 五月

・曾布川 寛

中国絵画における線

象・六号 三月

・竹内 実

中国農村の変化

京都新聞 一二月三日

●周樹人の役人生活—五四と魯迅・その一側面

同朋舎 一月

ホンコンの返還

京都新聞 一月二九日

中国とソ連

京都新聞 三月一六日

毛沢東の栄枯衰盛

文芸春秋 三月号

●魯迅「南腔北調集」(翻訳)

学研 四月

中国文学と自由

京都新聞 五月九日

「中華民国史」の新風

京都新聞 六月二七日

中国北方の風土と料理 (北京料理)

小学館 七月

「傷痕文学」から「反省文学」へ

京都新聞 八月一九日

●魯迅「書簡Ⅱ」(翻訳)

学研 八月

多発する教師殴打事件の不思議

MRI中国情報 八月号

不可解な中国の人口統計数字

MRI中国情報 九月号

文語表現からの脱却と古典の継承 国語通信(筑摩) 九月号

北京にて(一・二) 読売新聞(関西版) 九月十四日、二一日

「怨」の旗は中国人の心中に立つ M R I 中国情報 一〇月号

北京—モスクワ—パリ 京都新聞 一〇月二二日

遠くて近いは中ソ社会主義の仲 M R I 中国情報 一一月号

魯迅文学の啓示—「故郷」「藤野先生」に即して 国語教育(東京法令) 一一月号

・多田 道太郎

からだ百面相(三二—四三)

共同通信社(配信) 一九八四年四月—八五年二月

大阪は「水の都」か 楽叢書 八四年二月

・田中 淡

寺院建築(中国)、住宅(中国)、壇、治水(中国)、庭園(中国)、塔(中国)、土木技術(中国)、その他

「大百科事典」平凡社 三月

牌楼、橋(中国)、未央宮、門(中国)、煉瓦(中国)、楼閣、

魯班、その他 「大百科事典」平凡社 六月

古代中国画像の割烹と飲食

(石毛直道編)「論集 東アジアの食事文化」平凡社 八月

書評・村松伸著「中国建筑留学記」 都市住宅(鹿島出版会) 九月

・谷 泰

ディレンマへの手法—日常性の中での模倣

思想 岩波書店 二月

記憶装置と時間 新岩波講座「哲学」七巻 月報2 六月

学界五〇年に想う：中心のない竜巻の中から

「民族学研究」民族学会 六月

キリスト教とヨーロッパ精神—とりわけ女性的性をめぐって

「民族の世界史」(6) 山川出版 七月

音声と形姿 「文化人類学」一号 アカデミア 七月

・富永茂樹

この記号化していくなかで 建築と社会 四月

Who's afraid of the chairman? 季刊へるめす 三号 六月

統計と衛生—社会調査史試論(阪上孝編)「一八四八—国家装置と民衆」

ミネルヴァ書房 九月

・狭間直樹

●中国歴史学の新しい波—辛亥革命研究について(共編著)

霞山会 二月

日中学術交流と陳慶華先生 東亜 二月号

視点 毎日新聞 四月—六月

一冊の本・荘子 京都大学新聞 四月一六日

有関孫中山早期活動的重要史料

光明日報(史学專欄) 三八六期) 四月一七日

中川書簡と北京の国際シンポジウム 京都新聞 五月一五日

孫文記念の国際学会 毎日新聞 五月一六日

茅台酒賛 月刊百科 六月号

中華民国等諸項目(世界大百科事典)

平凡社 一九八四年一〇月—一九八五年六月

革命党領袖孫中山

〔孫中山研究論叢〕第三集

中山大学 一〇月

・林 巳奈夫

●戦国時代出土文物の研究(編)

春秋戦国時代の金人と玉人

〔戦国時代出土文物の研究〕

京大人文研 三月

獣鑑・鋪首の若干をめぐって

東方学報 五七冊 三月

・樋口 謹一

あるレクイエム

神戸大学文学部追悼文集刊行会編「橋本峰雄

教授追悼文集」

三月

・平田 由美

近代文学とパンクチュエーション——明治初期作家たちの区切り

符号をめぐって——

「一九世紀日本の情報と社会変動」

京大人文研 三月

明治の文章と御文章

さろん日本文化 一五号 四月

近代文学におけるロマネスクの系譜——露伴の「語り」をめぐって——

国語国文 五四—六 六月

・古屋 哲夫

日中戦争にいたる対中国政策の展開とその構造(古屋編「日中

戦争史研究」所収)

吉川弘文館 八四年一二月

近代化過程と天皇制(法学セミナー総合特集「これからの天皇

制」所収)

日本評論社 五月

●日中戦争

岩波書店 五月

・細川 弘明

アンデス東斜面溪谷部・ケチュア農民の生業と交易活動

「国立民族学博物館研究報告」一〇巻二号 一〇月

・前川 和也

Cereal cultivation in the Ur III period, *Bulletin on Sumerian Agriculture* I (1984), Cambridge Univ. Press, England.

・宮崎 法子

石濤と黄山図卷

泉屋博古館紀要 二号 三月

・麥谷 邦夫

●老子想爾注索引

老子想爾注について

東方学報 五七冊 三月

・柳田 聖山

今月のことば

花園 一二月—一月

禅語コーナー

同右

大灯の選択、図版解説、大灯国師年譜(釈文)(入矢、丸岡編

「大徳寺墨蹟全集」第一巻のうち) 毎日新聞社 一二月

生死の問題(京大広報第二八二号)

一休と良寛を読む(朝日カルチャーセンター講座カセット参考

資料) 中国仏教のこと(京都新聞夕刊「現代のことば」一五五号)

荔支のふるさと(新・禅仏教をゆく、第一話) 一二月

禅文化 一一五号 一月

盲安杖、その他(日本古典文学大辞典第六卷) 岩波書店 二月

語心の桜(京都新聞夕刊「現代のことば」一三二号) 二月

語録の歴史―禅文献の成立史的研究

東方学報京都五七冊 三月

わたくしの桂林体験(藤原みてい墨彩画集のうち)

光村推古書院/じゅらく染色資料館 三月

●統・純禅の時代(祖堂集ものがたり) 禅文化研究所 四月

南方の嘉木(「耕雲」特別寄稿) 吉祥会 四月

枇杷の葉の旅(新・禅仏教をゆく、第二話)

禅文化 一一六号 四月

一見の客(京都新聞夕刊「現代のことば」五二五号) 四月

昨夜落花の雨、満城流水香ばし(禅語の夏)

清泉 一八号 四月

一休と良寛 春秋 二六八号 四月

根っ子の文学(京都新聞夕刊「現代のことば」五二五号)

五月

禅、禅宗、仏教など(大百科事典一一一六) 平凡社 六月

良寛の聞光 聞光 二八号 六月

古仏を恋うる(新・禅仏教をゆく、第三話)

禅文化 一一七号 七月

「ア」と「ザ」のあいだ(京都新聞夕刊「現代のことば」六二七号)

七月

地蔵二題(京都新聞夕刊「現代のことば」二四四号) 八月

磨鏡台の朝(新・禅仏教をゆく、第四話)

禅文化 一一八号 一〇月

一封の書は一声の鳴くに在り(禅語の冬)

清泉 二〇号 一〇月

●禅と日本文化(講談社学術文庫)

講談社 一〇月

今は昔、日本文化論(京都新聞夕刊「現代のことば」一九九号)

テーマ別共同研究方式で古代中国の文献を会説(研究前線)

政府の窓・時の動き 一一月

白隠の禅面を読み直す―生涯三百年に当って(毎日新聞夕刊

「文化」八二五号) 一一月

一休、風狂、文学を生きる(ザ・クラフト6)

京都国際工芸センター 一一月

・山下 正男

量子力学の論理学的構造 人文学報 五八号 三月

●論理的に考えること

岩波ジュニア新書 八月

・山田 慶児

●新発見中国科学史資料の研究・訳注篇(編著)

京大人文研 三月

●中国古代度量衡図集(浅原達郎との共訳)

みすず書房 八月

夜鳴く鳥

思想 一〇月号

・山本 有造

書評・佐藤雅美「大君の通貨」 エコノミスト 二月一二日号
三人ガワー 吉田光邦編「一九世紀日本の情報と社会変動」

京大人文研 三月

インタビュー・堀江保蔵名誉教授に聞く

経済論叢 一三五巻四号 四月

コメント・原田敏丸・宮本又郎編「シンポジウム・歴史のなかの物価」 同文館 一〇月

・横山 俊夫

不思議のヨーロッパ―在仏日本公使館雇マーシャル氏の西洋発見 吉田光邦編「一九世紀日本の情報と社会変動」

京大人文研 三月

編集後記 同右所収

食い意地からの現代論(書評 橋本憲一「うまい魚が食いたい」) 「中央公論」五月号

日本研究ハイギリスV(G・ダニエルズと共同執筆) 「平凡社大百科辞典」一一巻所収 六月

Frederic Marshall as an employee of the Japanese

Legation in Paris, The 2nd International Symposium

on Yamai Fukui Conference, (Fukui University) 一〇月

在仏日本公使館雇フレデリック・マーシャル「第二回ザ・ヤト

イ 国際シンポジウム福井大会研究発表アブストラクト集」

福井大学 一〇月

The importance of Japanese studies in Britain for

future international relations in the Asia-Pacific

Region, NIRA-RITA-SOAS Conference on the

Future of the Asia-Pacific Region, (London: Cham House)

節用集と日本文明 芳賀徹編「江戸とは何か 1 徳川の平和」

至文堂 一〇月

・吉川 忠夫

書と道教の周辺(一)～(五)

書道芸術 一、三、五、九、一二月号

王羲之の人と時代 書道芸術 七月号

●中国古代人の夢と死 平凡社 九月

人

文

第三二号

一九八六年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

中西印刷株式会社

非売品